

平成28年熊本地震 日本赤十字社の主な活動

医療救護活動



日赤は日頃から全国に約500班の救護班を準備し、5月14日までに約207の救護班（救護班：医師1人、看護師長1人、看護師2人、主事2人を基本として編成）が熊本に駆け付け、巡回診療やdERU（仮設診療所）などで医療支援や救護活動にあたりました。基幹災害拠点病院の熊本赤十字病院と合わせて、約5000人の傷病者の診療を行いました。

衛生・健康管理



長引く余震で、車中泊や避難所での生活を余儀なくされる方が多いため、健康管理や衛生面での注意喚起を行いました。エコノミークラス症候群を予防するための教室を開き、弾性ストッキングを配布、手洗い場の設置、熱中症対策の呼び掛けなどの支援も行いました。

赤十字ボランティアによる支援



4月17日に青年赤十字奉仕団員が中心となって熊本県支部災害ボランティアセンターを立ち上げ、のべ261人が活動。救護班のナビゲーション、救援物資の積み込みおよび搬送、救護班の記録補佐、避難所でのニーズ調査などを行いました。全国各地でも1328人が義援金の受付業務などのボランティア活動を展開しました。

救援物資の配布



避難所ニーズの調査結果に基づき、日本赤十字社各県支部が備蓄する救援物資を熊本県支部、大分県支部に集約し、ボランティアの協力を得て被災された方へ迅速に配布。毛布22480枚、緊急セット654セット、安眠セット6401セット、ブルーシート11230枚。

こころのケア



看護師や臨床心理士からなるこころのケア班は、被災された方や被災自治体の職員などのストレスを少しでも軽減するために、傾聴やリラクゼーションを行い、地域の保健師などと協力し活動しました。6月13日に活動を終了し、地元医療機関などに引き継ぎました。

被災された方の声



里山正秋さん（71）（左）

古閑昌子さん（68）（右）

（4月16日避難所・

御船町スポーツセンターで）

通っている病院が被災して、いつも飲んでいる薬がなく、不安に思っていましたが、赤十字のマーク、救護服を見て安心しました。（古閑さん）全国他県から赤十字の皆さんのが来てくれているのがすごくうれしいです。（里山さん）